写真左／現在、栃木県中央公園に残る、旧宇都宮商工会議所の玄関部分（橋本優子氏提供）　写真右／解体前の旧宇都宮商工会議所（㈲藤原設計事務所提供）

特集1／旧宇都宮商工会議所と大谷石

「旧宇都宮商工会議所の建物は、建築文化のサンプリング」

宇都宮市内各所に残る、大谷石の建物や構造物。大谷石は宇都宮の大きな特徴です。けれども長い年月の間には、優れた大谷石建築が失われたことも少なくありません。旧宇都宮商工会議所もその一つです。栃木県中央公園に一部が残る旧宇都宮商工会議所の特色や魅力、大谷石のすばらしさについて、旧宇都宮商工会議所保存の中心に立った藤原宏史さん（宇都宮商工会議所名誉議員、㈲藤原設計事務所代表取締役）と近代デザイン史が専門の橋本優子さん（宇都宮美術館主任学芸員）に、お話しいただきました。

対談

大谷石の街・宇都宮の過去と未来

宇都宮商工会議所名誉議員　藤原宏史さん
宇都宮美術館主任学芸員　橋本優子さん

宇都宮商工会議所
名誉議員
藤原 宏史さん
（㈲藤原設計事務所 代表取締役）

大谷石の魅力を取り入れる難しさ

藤原　建築家として大谷石という素材の魅力を語るのは、実はなかなか難しいのです。

市内の石蔵や、大谷地区にある大谷石を掘り出した後の空間などを見ると、建築家の手を借りなくても、すばらしいものがたくさんあります。それは、石の持つ力みたいなものがあるのだと思います。下手に手をかけると逆に魅力を減らしてしまう。昔の大谷石を本格的に使った建物を見てしまうと、残念ながら新しいものにはなかなか心を動かされないですね。

私も建築家ですから、何とかうまく使いたいのですが、実のところちょっと使いあぐねています。

橋本　やっぱり、旧帝国ホテル・ライト館という偉大な事例がありますから。それに対して、素材の特質を無視して、失敗している現代の作品は残念な印象ですね。

藤原　建築家フランク・ロイド・ライトの作品を見てしまうとねえ、あそこまでやらないとダメかなと思わされます。

市内中心部で、大谷石を店舗に使用する例も増えていますね。あれは、天然の素材の良さの魅力ですね。今の世の中、どうしても石油製品に囲まれて生きていますから、身近な天然素材としてのテクスチャーが新鮮に感じられる、ということもあると思います。大谷石には、そういう良さもありますね。

ただ、へたな使い方をすると逆に嫌らしくなったりするので、やっぱり難しいですね。

日本中にある「石の街」

橋本　私は美術館に勤務していますが、もともと専門は近代デザイン史です。それで、産業史にも大変興味があり、そういった観点から大谷石に魅力を感じています。

よく「日本は木と紙の建築文化」と言われますが、近代以降を考えると、石の重要性が高いのです。宇都宮もそうですが、石の街って、意外にたくさんあります。近い所では白河市が白河石の街です。伊達市は花崗岩がたくさん見られます。仙台市も石の街ですね。

実は近世以前も、日本建築に石は取り入れられてきました。代表的なのは城の石垣です。それが顕著になったのが近代以降なんです。

藤原　以前、長崎市を訪れた時、あそこも石の街だと感じました。あそこも大谷石と同じ凝灰岩です。ただ、グラバー邸など、宇都宮とは石の使い方が少し違いますね。もっと洋風建築になっています。一方宇都宮は、石蔵が多いですね。

橋本　そんな中で大谷石は何が魅力かというと、それは宇都宮地域の近代化に、大変大きな意味を持っていること。今、藤原先生は「石蔵が多い」とおっしゃいましたが、その他にもさまざまな建造物で、たくさん使われています。建物の基礎や、鉄道の擁壁、プラットフォーム、橋脚など、本当にあらゆる建造物に大谷石が使われています。身近にある素材だから、どんどん使っているのですね。

宇都宮美術館
主任学芸員
橋本 優子さん

で、そういった「大谷石の街うつのみや」の風景を、例えば川上澄生や地域の画家たちが、画題として取り上げ、さまざまな作品を残しています。それを見ると、当時の宇都宮が本当にモダンな街で、大谷石が大きな役割を果たしていたのだなと実感します。

貴重な文化遺産、歴史遺産

藤原　宇都宮で、大谷石が最も使われた時代は、関東大震災以降から昭和にかけてです。高度成長期あたりまでがピークになります。

橋本　その頃は、大谷石のすばらしい建物が、街のあちこちにありました。それが今、徐々に失われつつあるのはとても残念です。例えば東武鉄道南宇都宮駅は、まさに建築と鉄道と大谷石が密接に結びついていた時代を思い起こさせます。貴重な歴史遺産であり文化遺産だと思いますから、ぜひ長く残して欲しいと思います。

藤原　宇都宮まちづくり推進機構が最近『石の街うつのみや遺産と景観』というパンフレットを出しましたね。橋本さんも手伝っておられます。そのパンフレットに宇都宮市内の大谷石建築や建造物がたくさん載っています。

私は、街の歴史を学ぶことは非常に重要だと考えています。

橋本　地域の歴史を知ることが市民のアイデンティティにつながるのではないでしょうか。歴史を知ることで、真のプライドやブランドを発見し、故郷への愛情を持つ事につながっていくのだと思います。

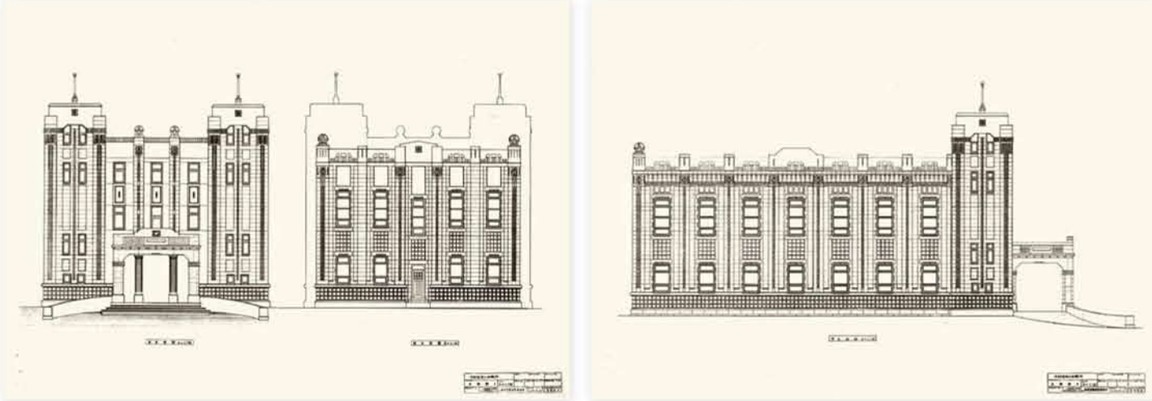
藤原　そのためには、まずどんなものがあるのか、実際に体験することが重要ですよね。

橋本　そうですね。小中学校で積極的に教えてくれるといいのですが。

藤原　こういったパンフレットを頼りに、先生方もまず自分で歩いていただけると、良いのではないでしょうか。

◎大谷石とは…

宇都宮市北西部の大谷地区から産出される大谷石は、火山灰が凝固した「凝灰岩（ぎょうかいがん）」です。凝灰岩の特徴には軽さ、軟らかさ、孔の多さなどが挙げられます。加えて大谷石は「ミソ」（斑点）があることが、大きな特徴になっています。加工しやすい大谷石は近世以前から使われていましたが、本格的に活用されるようになったのは、鉄道など運搬手段が整備された明治以降でした。アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが大谷石とコンクリートを組み合わせてつくった「旧帝国ホテル　ライト館」は有名です。宇都宮市内には松が峰教会や東武鉄道南宇都宮駅など、多くの建物が残されており、また近年は行政のまちづくり支援補助などで店舗に大谷石を活用する例も増えています。



旧宇都宮商工会議所復元図面（㈲藤原設計事務所提供）

旧宇都宮商工会議所の特徴

橋本　旧宇都宮商工会議所も、今では失われてしまった大谷石のすばらしい建築物の一つです。幸い、そのごく一部ですけれども、栃木県中央公園内に移築復元されていますので、往時の姿の一端に触れることができます。

藤原　昭和54年に解体されるという時、建築士会青年部のメンバーが、何とか保存できないかと運動を起こし、その一環として、詳細な記録を残しました。この図面は、現地調査を行って作成したものです。これだけでも、当時の姿がお分かりいただけるのではないでしょうか。

橋本　中央公園にある旧宇都宮商工会議所を写真に撮って、ヨーロッパの知人に見せると「これはどこだ、東京か」「19世紀の建物か」と必ず聞きますね。それで「違う、わが街宇都宮だ、20世紀のものだ」と答えると、みんなビックリします。それほどインパクトがあるのです。

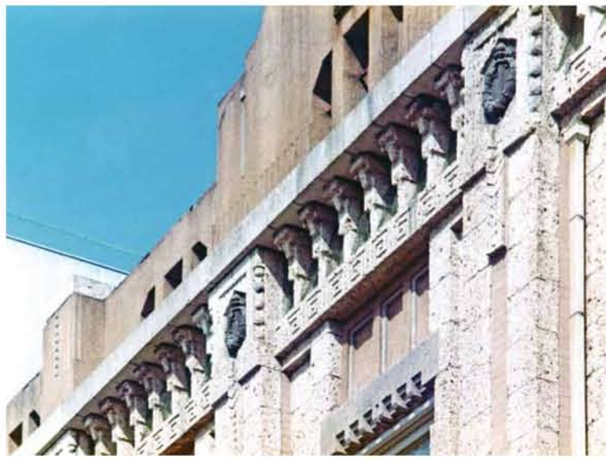
藤原　私は今でも、目を閉じれば建物の姿を思い出す事ができます。本当に、なじみ深い建物でした。

　旧宇都宮商工会議所の魅力は、簡単には語り尽くせないほどいろいろあるのですが、一つにはライトに代表される新しい文化を象徴していたことでしょうね。しかも、それを大谷石を使って実現したということが、またすばらしい。あの建物ができた時、みんなが喜んで、すぐに宇都宮の名所になったそうです。西洋建築様式とライト的デザインを大谷石で表現したことが、大きなインパクトを与えたのでしょう。

◎旧宇都宮商工会議所について…

旧宇都宮商工会議所は、大正11（1922）年に建築を決定、昭和2（1927）年に着工し、翌昭和3（1928）年4月に竣工しました。当初は鉄筋コンクリート造3階建て、総建坪332坪の建築案でしたが、大谷石石材問屋組合から大谷石使用の陳情を受け、大正15（1926）年に大谷石の化粧積みに変更しました。設計は安美賀で、彼の代表作の一つです。

　第二次世界大戦の戦火にも堪えた建物でしたが、昭和54（1979）年に解体されました。その一部が栃木県中央公園に移築復元され、現在も見ることができます。



ライトの影響が見られる旧宇都宮商工会議所のディテール（㈲藤原設計事務所提供）

さまざまな建築文化の集約

橋本　現在残されている部分だけを見ても、さまざまな建築の様式が見て取れます。建物全体は、建築を学ぶ人にとって、西洋建築のデザインのディテールを知るのに最適な教材だったと思います。

　古代ギリシャやローマあり、近代あり、異国趣味あり、もちろんライトの影響もあります。そして設計者の安美賀オリジナルもあります。

　私は、もしかしたら安さんが、教材を作る気持ちで設計したんじゃないかと思うんです。学校の先生でしたから。

藤原　そういう要素は、確かにありますね。

橋本　まるで建築史のサンプリングですよ。ある意味、昭和初めのポストモダンだったのかも知れないと思ったりもします。

藤原　安さん自身がどこまで自覚していたかは分かりませんが、そういうことは十分考えられますね。さまざまな要素を自分のものとして、みごとに組み合わせています。

解体前の旧宇都宮商工会議所（㈲藤原設計事務所提供）

安美賀（やす・みよし）

明治18（1885）年～昭和28（1953）年　安美賀は、明治から昭和時代にかけて活躍した教育者、建築家です。茨城県出身。大正12（1923）年に栃木県技師および栃木県立宇都宮工業学校初代校長に就任。在職中に宇都宮商工会議所の設計の依頼を受け、一度は断りながらも最終的には引き受け、みごとな建物を作り上げました。他に栃木県教育会館を設計しましたが、いずれも現在は解体されてしまいました。

　その後、足利工業学校校長をつとめ、昭和21（1946）年に退職して栃木県を去っています。

　現在、宇都宮工業高等学校には安初代校長の胸像が飾られています。

安　美賀 氏
『栃木県立宇都宮工業高等学校初代校長 安美賀先生胸像の復原』所収

大谷石は非常に現代的なテーマ

藤原　これからの宇都宮を考える時、大谷石はやはり外せないと思います。大谷石の建物をどう残して行くかが重要です。

　旧宇都宮商工会議所が失われてしまったのは、非常に残念です。けれども重要なのは、これ以上壊されないようにすることです。残す価値のある建物が、まだまだたくさんあります。それをどうやって後世に伝えて行くかを、真剣に考えなくてはいけないと思いますね。

橋本　宇都宮は、伝統や歴史に対するこだわりが薄く、断続的な更新をかさねる風土なんですね。それが良い、悪いは別としまして、残す価値のあるものは守っていきたいですね。

藤原　宇都宮のまちづくりは、経済発展に重きを置いたものだったと思います。それは上手く行って、豊かな街、力のある街になったのですが、その代わり昔からあるすばらしいものを「古いもの」ということで、取り去ってしまったんです。

　だから、大谷石について考えることは「経済発展中心だけで良いのか」と問い直すことでもある。非常に現代的なテーマにもつながっていきます。

橋本　歴史教育の重要性も、挙げたいと思います。先ほども触れたように、客観的に伝統を掘り下げ、自らの歴史観を育む教育がなされないと、大谷石だって、それが何なのか、どう使われて、わが街にどんな意味があるのかについて、不案内になってしまいます。そこを知ることで、宇都宮のすばらしさに気づき、郷土愛に目覚めて欲しいと思います。

藤原　そういう意味でも、大谷石はこれからも重要なキーワードであり続けるでしょうね。

　それから、特筆すべきことですが、旧宇都宮商工会議所も、その前の旭日館をつくる時も、当時の商工業者は「良いものをつくろう」と大変な努力をして、多額な資金を集めています。そういう商工業者の意識も、すばらしかったんだと思います。

　安さんは当初、設計の依頼を断りました。しかしそれを商工会議所の方々が頼み込んで、決心を翻らせて、ついにその依頼を受けることになったのです。当時の関係者の見識は、すばらしかったと思います。

橋本　昔は「旦那衆文化」というものがありました。ただの金持ち、成功者ではなく、地域のために積極的に身銭を切っていく人たちです。そうして「自分が生きている間に結果が出なくてもいい」と考える。自分のためではないんですね。街の未来と次世代のために、汗をかいていたんです。そういう商工業者が元気な街だったから、大谷石も元気だった。大谷石が輝く街であり、時代だったのだと、私は思います。

当所名誉議員・藤原宏史さん（左）と宇都宮美術館主任学芸員・橋本優子さん（右）

参考資料：
『大谷石の来し方と行方』（宇都宮美術館編）
『石の街うつのみや　遺産と景観』（宇都宮まちづくり推進機構編）
『宇都宮商工会議所百年史』（宇都宮商工会議所編）